

# A c a n t h u s

第43号

平成24年2月7日  
茨城県立土浦第一高等学校  
進修同窓会旧本館活用委員会

昨年ほど本校旧本館が世間の注目を浴び、話題を呼んだ年も珍しい。NHK朝の連続ドラマ『おひさま』で、ヒロインが学ぶ女学校として、旧本館がしばしばテレビに登場したためである。県外からも見学者が相次いだり、同窓会事務局にも多くの卒業生から「毎日、楽しみに見ている」と、電話やたよりが寄せられたりした。改めてテレビ・マスメディアの影響力の大きさに驚かされた。

実は旧本館が撮影現場となったのは今回だけではない。そこで、今号も含め、本校が映画やテレビのロケ地となった際の“隠れエピソード”を拾ってみたい。



撮影ではドイツ大使館執務室となった旧校長室

## ロケ現場のタレントの素顔とは

知る人ぞ知るロケ秘話。それは、本校旧本館が10年ほど前から、映画やテレビのロケにたびたび使われ、そこで見せるタレントの素顔である。10年前と言えば、進修同窓会の旧本館活用委員会が発足し、旧本館を本格的に公開し始めた時期でもある。その頃、県では企画部地域計画課にフィルムコミッション推進室（いばらきフィルムコミッション）を立ち上げ、地方活性化政策の一環として、豊かな茨城の自然や文化を積極的に活かそうと、映画やテレビのロケ誘致に乗り出していた。もっともそれ以前から首都圏に近く、比較的自然に恵まれていた本県は、つくばみらい市の「ワープステーション江戸」がNHK大河ドラマの撮影地として聞こえ高いように、時代劇などのロケ地としてよく利用されてきた。そしてこれまでの実績をより確かなものとし、さらに強く推進すべく行政が動き出したのである。

平成15年夏、この「いばらきフィルムコミッション」を紹介し、フジテレビが、本校旧本館でのロケを打診してきた。天才女性ピアニストの半生を描いたテレビドラマ『フジ子・ヘミングの軌跡』のシーンを探りたいとのことであった。旧本館をドイツ大使館に、館内の校長室を大使の執務室に見立て、撮影が行われた。画鋲一本の傷も許されない国重文の建物に道具や小道具、撮影機材が大量に持ち込まれた。張り詰めた空気の中、最終ロケに立ち会うことを余儀なくされた私どもは、建物や備品に損傷・損壊が及ばないよう細心の注意を払い、監視役として目を光らせた。この時、大使役を演じ

ていた岡田眞澄（故人）氏は撮影の合間に気さくに私どもに話しかけてきた。その全てまでは今となってはおぼろげだが、旧制中学校校舎にしては誠に華麗で立派な建物だと感心していたこと、穏やかで飾らない人柄が強く印象に残っている。



大量の機材を持ち込む石原軍団のロケ隊

平成17年春には、やはり「いばらきフィルムコミッション」を通じて、石原プロの映画ロケの話が持ち込まれた。石原慎太郎原作『弟』の映画化ということで、大型コンテナトラック数台に積んだ膨大な機材と、バスなどに分乗した大勢のスタッフを送り込まれてきた。それは予想を遙かに凌駕し、度肝を抜かれた。そして旧本館の復元教室が慎太郎の弟裕次郎の高校時代の教室として使用されたのだ。

ヤニーズの超人気スター長瀬智也ということもあって、どこで知ったのか、かなりの見物人が集まってきた。その方にも神経を使いながら、撮影現場には十分に目をこらしていなければならぬ。現場は照明や各種調整機器が所狭しと置かれ、そこを大勢のスタッフ動き回っている。撮影の邪魔になってはいけないし、かといって現場から離れていては立ち会いの役目を果たせない。私どもはその位置取りにも、千思万考、苦心惨憺するのである。大抵の場合、私どもは本館内外を見通すことのできる玄関階段付近で全体的な動きに目配りしつつ怠りなく注視する。そうした中、撮影の合間の休憩時間に、主役の長瀬智也が玄関に出てきて、付け人にたばこの火をつけさせようとした。私はとっさに「ここでの喫煙はご遠慮ください」と告げた。片膝をついて、ライターと灰皿を手にしていた付け人は困惑の表情を見せたが、長瀬本人は大変恐縮がり、「うっかりしていました。文化財の建物の中で、たばこはしないですよね」と爽やかな笑顔でたばこをポケットに収めた。「さすがだ」と思った。一流のタレントだけのことはあると得心がいった。



復元教室で『弟』ロケの授業風景

（生徒達の中に主役の長瀬智也がいる。ただ本校生徒・関係者は誰もいない）

## 女学校・兵学校と七変化の「旧本館」

平成20年には、テレビ朝日ドラマスペシャル『男装の麗人〜川島芳子の生涯』という作品も本校が撮影の舞台となった。主人公芳子を通う女学校（長野県松本高女、大正10年頃）の校門シーンは、本校旧正門で撮影された。馬に乗って登校して来た芳子が、高女・正門前で次のようなやりとりをする場面である。

男の教師二人、門の前で両手を広げて立っている。その前に馬を止め、馬上から教師を見下ろしている芳子、気色ばんだ様子で、芳子「いったいどういことですか」  
教師1「校長先生の命令だ。馬を中に入れてるわけにはいかん」

教師2「家に戻り、馬をおいてから再登校しなさい」 （台本より）

今回の撮影スポットは旧本館ではなく、旧正門。このときは、文化財校舎に劣らない気品と風格を有する旧正門の存在に改めて気付かされる機会でもあった。

また、同年の夏には、東京・武蔵野の「私立女学園高等部」を舞台とした青春学園物語の人気アニメ『マリア様がみてる』が実写映画化され、国重文校舎の一番となった。本館中庭に純白のマリア像（実際は発泡スチロール製のハリボテ）が置かれ、清純な乙女たちの学園生活の様子が描き出された。女人禁制とも言える旧制中学校校舎であった旧本館は、ミステリアスでお洒落なミッシェンスクールに「変身」した。これがまた、やんわりと温かい愛につつまれた雰囲気醸し出され、マリア像とよく調和した空間をつくり出していたから不思議である。

さらに数年前には、土浦市の観光商工業課にも「つちうらフィルムコミッション」

が設けられ、本校へのロケ申し入れが急増した。平成21〜23年にかけては、NHK関係のロケだけでも5件も続いた。ドラマスペシャルの『白洲次郎』、同じく『坂の上の雲』、「トライエイジ」三世代の挑戦」の『金田一家の物語』、そして連続テレビ小説『おひさま』である。

いずれも旧本館の復元教室が主に利用された。この国重文校舎は、『白洲次郎』では旧制中学校に、『坂の上の雲』では海軍兵学校に、『金田一家の物語』では帝国大学に、『おひさま』では高等女学校に、明治・大正・昭和の各時代の様々な学校に擬せられ、どれも見事な「絵」になっている。もちろん優れた映像制作技術によるものであるが、この建物の計り知れない造形の豊かさが多様な要請にしっかりと応え得たものだと言えよう。

### 旧本館を見て回る売れっ子俳優

立ち合ったロケでは、万事徹底する現場の「気迫」に、いつも圧倒されていた。

『坂の上の雲』では、海軍兵学校の生徒宿舎として旧本館の第四資料展示室が充てられ、部屋一杯に簡易ベットが並べられた。そこで、入学したばかりの生徒たちが起床の合図で飛び起き、急いで制服に着替えて廊下に飛び出すシーンが撮影された。その光景を近くで見ていたが、OKが出るまで「何回」撮り直しが行われただろうか。この一場面だけでも数10分の時間を要している。それだけではない。部屋を生徒宿舎に見せかけるために、古めかしい仕様のベットをわざわざ用意し、窓にはカーテンを吊るし（文化財校舎であり、事前打ち合わせで壁などに釘一本打たないことを確認。そのため、この作

業にはかなりの工夫と時間を要した）、さらに部屋の壁際には、制帽架けを設置するなど、最高の作品づくりにも八方手を尽くし、準備は優に数時間を費やした。



海軍兵学校の宿舎  
（旧本館西端・第四資料展示室）

後にこのシーンをテレビで見たが、1分足らずの場面であった。僅かなワンカットに、これ程の労力や時間を惜しみなく注ぎ込む映像文化の特異性とこだわり、さらに完璧を求める情熱と努力を知った。



東京帝国大学で講義する金田一博士  
（旧本館復元教室）

緊張感にあふれ、妥協を許さない創作活動は延々と続けられるのであるが、出演者にとつては自分の出番まで待つ時間が生じて来る。多くは、控室（多くの場合、進修学習館）で台本に目を通したり、仲間と談笑に興じたりしている。また時には旧本館周辺を散策する者もいる。

そうした中であって、『金田一家の物語』のロケの時、学生役で出番を待っていた若者の一人はデジカメを手に、しきりに旧本館のあちこちを見て回っている。この建物にかなりの興味を示している様子なので、声をかけてみた。古い建造物が大好きだというので、簡単な説明をしながら館内を案内した。人懐こい笑顔で話しかけてくる好青年であった。自然に会話が弾んだ。これまでもテレビドラマなどに出演しているが、いずれも端役でまだまだ役者としては半人前であるとのことや、最近ではNHK大河ドラマ『竜馬伝』にも出させてもらったことなどを話してくれた。改めて名前を伺うと「駿河太郎」と名乗ってくれた。そして一通り終わると、差し上げた「旧本館パンフレット」を大事そうに鞆に納めて、撮影現場に戻って行った。彼の後ろ姿を見送りながら「駿河太郎」という名前を覚えておこうと思った。後で知ったことであるが、彼は、落語家笑福亭鶴瓶の長男で、今売り出し中の俳優なのだ。そう言えば、現在NHKで放映中の『カーネーション』にも出演していたという。（次号に続く）

故岡田真澄氏  
（左）と、全口飯  
に立ち会った  
村旧本館活用委  
員（元教諭）  
（平成15年8月）

